

たかひこ通信

町議会 6 月定例会は6月10日から20日まで開かれます。皆さまのご意見・ご要望をお寄せ下さい。

部内資料 たかひこ通信 No. 61
2016/5/22 〒399-8601 長野県北安曇郡池田町大字池田3089-4
薄井孝彦 Tel・Fax 0261-62-5093
mail: peach-ikea@peach.plala.or.jp
http://web-ariakesan.com/

4 月町議会臨時会

◎国の交付金を用いての地域公民館の新築・改築予算などを議決。
◎副町長に大槻 覚（おおつき さとる）氏を同意。

4 月臨時会は 4 月 26 日に開催され、28 年度町一般会計補正予算を議決し、副町長の選任案件を同意した。党議員も必要な内容と考え賛成した。議決された概要は次の 2 点である。

1. 一般会計補正予算案

主な内容は次の 3 点。

①地域公民館（高齢者支えあい拠点施設）の新築・改築予算

○予算額 1 億 2 6 7 7 万円

○新築 3 地区公民館

・三丁目、滝沢、広津

・一公民館への国交付金は 3 1 0 0 万円

○改築 2 地区公民館

・豊町、相道寺

・一公民館への国交付金は 1 0 5 0 万円

【財源】

国交付金 1 億 1 6 百万円

自治会協力金 1 0 4 8 万円

町の一般財源 2 9 万円

いずれの施設も町が本年度中に建設し、町の建物となる。自治会は町から借り受け、サロンなどの高齢者支えあい事業を行い、施設管理を行う。



27 年度国交付金を用いて完成した「東町地区高齢者支えあい拠点施設」

②遊休桑畑のブドウ園整備予算

○国・県交付金を利用して鶴山地区の遊休桑畑（3.8ha）を 28・29 年度の 2 カ年でワイン用ブドウ園として整備する。

○全体事業費 9 5 0 0 万円

【財源】国 50 %、県 10 %、町 35 %、地権者負担 5 %

・28 年度予算 6 1 1 4 万円

・地権者は 26 名おり、農業生産法人「ヴィニョブル

安曇野」（取締役・林中の横山嘉道氏）整備地を貸す。

・ブドウ栽培開始は 29 年 1 月を予定。

・4 か所の沈殿池を置く。

ブドウ園整備予定地（鶴山四神社の北で町道より東の部分）

③公民館用ピアノ購入予算

寄付者の要望により、町公民館に新しいピアノを購入し、6 月 25 日の「第 35 回」で使用するようにする。

○予算額 3 3 7 万円

【財源】

てるる坊主浅原六郎基金

2. 同意人事案件

○副町長に元、長野県職員であった

大槻（おおつき）

覚（さとる）氏

（50 歳）の選任に議会同意を求める。

【提案理由】

同氏は県の産業・観光振興などに携わり、新しい目で町をみることで、副町長として適任である。

○任期・4 年間

○住所・林中

【経歴】

・上伊那郡箕輪町出身

・中央大学経済学部卒業

・昭和 63 年 4 月長野県職員採用（上級行政）

・長野県観光協会派遣

・産業政策チーム企画員

・観光振興課企画員

・環境政策課温暖化防止係長

・人材育成課課長補佐



5 月 6 日から着任した大槻副町長

旅行読売 6 月号に

池田町の「北アルプス展望の道」が紹介される

旅行読売では、6 月号で「美しい日本の歩きたくなる道 500 選」の中から「新緑まばゆい歩きたくなる道」として全国の 14 コースを紹介。

そのトップとして、池田町の「北アルプス展望の道」が選ばれた。記事では「北アルプス展望の道」の美しさ、道祖神、喫茶店、そば屋さん、美術館などコースの見どころを 14 コース最大の 6 ページをさき、懇切丁寧に解説している。

コースの素晴らしさとともに、ガイドマスター会など町民と町のコラボによりウオーキングに取り組んできたことが評価され、トップ記事に選ばれたと思う。この記事を契機に、さらに取り組みが強化できればと思う。

5 月連休中、ガイドマスター会の一員として、観光案内で高照山の白根葵（あおい）を多くの人に進めた。無事たどりついたのか心配になり高照山を管理している H さんを訪ね、お聞きした。

H さんから県道宇留賀池田線から高照山への入り口が分らず、行き過ぎて戻ってきた方があったので、誰にも分かりやすい看板設置を県道入口に設置して欲しいとの要望があった。さっそく、町振興課に伝えた。

島木赤彦先生の歌碑に 秋田県立角館高校 O B を案内

アララギ派歌人「島木赤彦」は長野師範を卒業し池田で先生として勤務した。そして、51 歳で亡くなる直前、秋田県立角館高校の校歌を作った。その縁で、角館高校 O B 2 人が 16 日に池田町を訪れた。ガイドマスター会の一員として二人を赤彦の歌碑に案内した。島木赤彦・岡麓（ふもと）先生を活かした町づくりをしなければと改めて思った。



旅行読売 6 月号をみたい方は地元の書店・観光協会まで